

編集後記

今年度の最初の会誌をお届けいたします。

春田氏の論文は、先の『田舎新聞』に続く大分の新聞研究の第二弾で、事情で今回は短編になりましたが、『田舎新報』になつての性格変化を、郷土史的枠組みを超えて、全国的政治状況の中に位置付けて分析され、さすがが自由民権期のでたれの研究者らしい切れ味を示しておられます。

鳥養氏の論文は、大分の近代遺産調査で注目を浴びている竹田市の四山社に関する文献による研究をまとめて戴いたものである。地方における土族授産や、特に地場産業資本の形成（または不形成）をめぐる状況は明らかにする課題に取り組むための先行指標となる研究と言えましょう。（なお、長編のため次号との分載とした）

平井氏の研究ノートは近世史研究会での報告を、実は無理にお願いして、急にまとめて戴いたものである。藩屋敷の売買など、私には（もとより浅学の故もあるが）目から落鱗の思いです。この魅力的で新鮮な研究視角の一層の展開が期待されます。

河野氏の史料紹介は、文化財保存の取り組みの緊急性が強調される（されざるをえない）今日、貴重な記録です。

なお、不手際で時間がなくなり、二枚以後は私が行った。校正ミスはひとえに私の責任であることをお断りし、ご寛恕をお願い申し上げます。

（野田）